

**事後評価報告書**  
**(日本-タイ研究交流)**

1. **研究課題名:** 「鉄含量の高いコメと鉄過剰耐性イネの開発を目指した遺伝子資源の同定」

2. **研究代表者名:**

日本側: 石川県立大学 生物資源工学研究所 教授 西澤 直子

相手側: National Center for Genetic Engineering and Biotechnology (BIOTEC)

Researcher, RUANJAICHON, Vinitchan

3. **総合評価:** C

4. **事後評価結果**

**(1)研究成果の評価について**

鉄欠乏誘導タンパク質の新機能(鉄欠乏を負に制御する等)を解明したことは高く評価できる。

一方、日本側チームからは多くの論文発表・学会発表があるが、タイ側チームとの学会発表及び共著論文が認められず、国際共同研究の成果として物足りない。研究題目も計画も鉄過剰耐性イネと謳っているが、成果の第一がOsHRZという鉄欠乏シグナルに関するものであり、これは過剰耐性とは逆の効果を有するため、目的との乖離があるように感じられた。HRZ遺伝子の機能と鉄過剰耐性との関わりについては、今後の研究進捗に期待したい。元素分析においては、双方(日本・タイ)の工夫がなされてはいたと理解するが、分析にサンプル量と時間を要しており、研究の発展としてはマイナス要因の一つであったのではないだろうか。また、サンプル測定システムの構築などで、もっと工夫ができたのではないだろうか。

**(2)交流活動の評価について**

インド型イネの形質転換に関わる実験手法を、交流活動を通してタイ側に提供した点は高く評価できる。また、イネ変異体ライブラリーより、鉄含有量の高い個体をタイ側・日本側で見出したことは、将来の遺伝子単離に向けた進展につながったと考えられる。

しかしながら、日本側からの渡航は初年度と最終年度に1回ずつであり、人的交流面で十分であったとは言えない。タイ側参加者の本研究に関する学会発表も少なく、実質日本だけで行った研究のように見え、相乗効果の観点に疑問が残る。

**(3)その他**

タイ側代表者所属機関での遺伝的資源の取り扱いの制約が厳しく、種子譲渡が難しい状況にあったことは理解できるが、研究期間中に何らかの工夫や修正ができたのではないだろうか。